

平成22年 3月31日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)

研究期間：2008～2009

課題番号：20820027

研究課題名(和文) 1930年前後中国における歴史学の形成：学術の同時代思想史

研究課題名(英文) The Formation of the Historical Profession in China around the Year 1930: A Study of the Synchronicity of Scholarship

研究代表者

竹元 規人 (TAKEMOTO NORIHITO)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80452704

研究成果の概要(和文)：1930年前後の中国における歴史学の形成過程について、歴史学と他の学問領域との関係、学術制度と学術構想との関わり、欧米・日本との学術的・思想的同時代性に注目する観点から研究を進めた。現在の中国における中国古代史認識のルーツと言うべき、1930年前後における中国古代史研究の展開について、当時の学術構想・営為を詳しく跡付け分析することで、新たな見通しを示した。

研究成果の概要(英文)：This research study analyzed the forming process of the historical profession in China around the year 1930, noting: (1) the relationship between historical studies and other fields of studies; (2) the relationship between academic institutions and academic programs; and (3) the synchronicity among academic programs in China, Japan and the West. I traced various academic programs and practices in China around the year 1930, and proposed a new framework to view the development of research on ancient Chinese history during that period, which provides the origin of recognition of ancient Chinese history in contemporary China.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：思想史、史学史、学術史、疑古、顧頡剛、傅斯年、中央研究院

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、1930年前後の中国における歴史学の形成過程について、西洋・日本との同時代史的視角を踏まえ、思想史分析に取り

組むものである。

中国(中国語圏、中華文化圏)という地域にとって、史学は特別な重要性を持つものと言える。それは、『史記』の昔から近年の日中間における歴史認識問題まで、「歴史」とい

うものに、中国の人々が強い情熱を注いできたことから明らかであろう。近代においては、欧米列強の圧力と中国の衰退という事態の中で、自国のアイデンティティ構築と関連して、中国古代史研究が特に重視された。1990年代以後、中国では近代史学史を始めとする学術思想史研究が盛んになっているが、それは第1に中国における史学の重要性によるものと言える。

これまでの中国語圏における近代学術思想史研究は、大きく見て次の特徴を持つと考えられる。(1)近代の学者から論者に至る学術の系譜の構築を意識して研究が進められている。(2)古代史研究を通じて「中国」のアイデンティティの確立を図るという近代の学者達の問題意識が、現在の問題として重視されている。(3)学術や思想の「本土化」(土着化)を志向する傾向がある。

これらは、自国・自文化における研究ならではの特徴と言える。他方、日本や欧米の研究者にとって、近代中国思想史への関心は主に革命と結びつく政治思想の領域に集中してきており、中国の研究者のような内在的動機が存在しない以上、学術思想史の研究は極めて乏しい。ただし、近代から現在に至る中国の知識人たちが史学を重視してきたという事実自体が、中国近現代における史学の展開を思想的観察・分析の主題とすることの意義を示している。

加えて、中国の外に位置する研究者は、上記(1)～(3)の文脈とは異なる立場から、独自の貢献をなし得ると考えられる。(1)においては、学術の系譜の構築が意識されるため、学者達の思想的継承・断絶関係について、単線的な見通しが示される傾向があり、より複雑で詳細な分析を加える必要がある。(2)についても、同様に論述のテーマ選択、論じ方、結論や評価に関して、異なる見解を示すことができる。そして(3)については、中国における学術の展開・近代的学術の内在化及び発展を重視する立場に対し、学術の世界的な同時代性に注目する必要がある。これまでの近代中国思想史研究には、大きく見て前近代からの連続性・中国の独自性を強調する立場(内在的アプローチ)と、近代における断絶・西洋や日本からの影響を強調する立場(外在的アプローチ)が存在してきたと考えられるが、その双方において、思想の世界的な同時代性は十分注目されてこなかったと言え、近代中国思想史研究全体の文脈から考えても、同時代性に注目する観点からの研究が求められる。

## 2. 研究の目的

上記の背景のもと、本研究は次の内容を目的とした。

近代中国における史学の形成を考える際、いくつかの転換点を考えることができるが、今日につながる学術体制・学術構想の確立という意味では、南京国民政府が成立した時期、すなわち1930年前後(1928-1937)を重視すべきである。この時期に重要な大学学科・研究所が設置されてディシプリンが確立し、そこで研究に従事した少壮学者達が、組織的に研究者を育成し、研究活動を展開して、今日に至る学統の出発点となったからである。

この時期の史学の展開については、近年、研究背景(1)に関連して、「疑古」から「釈古」ないし「歴史の再建」(「重建」)へ、という流れが提示されている。「疑古」とは、文献上の上古史記述の真実性を疑う立場であり、顧頡剛(1893-1980)編著『古史辨』第1冊(1926年)がその代表的作品である。そして「疑古」に対し、考古発掘の成果を活用して、「疑古」によって疑われた上古史を再構築しようとする動きが1920年代後半から強まっていったとされる。その代表人物が、伝世文献と出土文献の総合を図った王国維(1875-1925、その立場は「釈古」と呼ばれる)と、その業績を重視して上古史の「再建」を目指した傅斯年(1896-1950)であった。これは、専門的な中国古代史研究の領域における立場の違いのみならず、上古史認識を通して「中国」を歴史的にいかにか構築するかという問題に深く関わり、研究背景(2)の問題とも強い結び付きを持つ。本研究の目的の1つは、近代中国史学思想史全体の中で重要な意味を持つと考えられる、「疑古」から「釈古」ないし「再建」へという命題を、当事者の学術的営為を具体的に跡付け、容易には概括できない様々な方向性とその相互の関係を洗い出すことにより、再検討することである。それを通して、研究背景(1)(2)について、新たな見解を示し、必要な修正を加えることを目指す。

研究背景(3)については、学術の「本土化」が関心を集める中、顧・傅やその共通の師である胡適(1891-1962)らによる歴史研究を、プラグマティズム等の影響を受けた、中国の伝統に根拠を持たぬ研究方法として批判的に見る研究が出ている。これら研究の関心は、中国における近代学術の形成・展開を跡付け、現在から将来に至る中国学術の展望を示すことにあると言える(背景(1)とも関係)。

こうした関心は中国独自のものであるが、胡や傅ら当時の新進が長期間欧米に留学し、近代学術を受容しつつ中国で研究を展開したことを、歴史上の事実として研究していく志向が弱い。ただそれに対して、欧米近代学術の単純な導入として中国近代学術史を見るならば、当時の欧米の学術も決して固定した不動のものではなく、近代という時代の中で変動・展開の最中であつたという事実を見

落とすことになる。以上から筆者は、1930年前後の中国における歴史学の形成を、欧米や、中国より早く・体系的に欧米学術を輸入した日本との同時代性のもとで分析し、定位することを目指す。

## 2. 研究の方法

研究の方法としては、3点を特色とした。

### (1) 思想の時系列的展開の重視

まず諸々の構想や思想が時間を追って、他の思想と関係を取り結びながら徐々に形成・展開されていく具体的な経緯を跡付けることから出発する。その中で、特定のレベルに概括されないような、様々な方向性を拾い上げていく。従来の単純化された構図を見直す上では、こうした地道な作業が何より必要と考えられる。

顧頡剛と傅斯年是1927年から共に中山大学に所属し、語言歴史学研究所(以下、語史所)を設立・運営した。その中で民俗学・考古学・言語学等と歴史学の関係、学術の方法論といった点で対立を生じ、傅は1928年に中央研究院歴史語言研究所(以下、史語所)の所長となり、顧は1929年に燕京大学に移り、以後1937年に日中戦争を迎えるまでそれぞれの構想を実行していった。この1927年から1937年までの約十年間は、短い期間に多くの試みがなされ、20世紀前半期中国において近代学術が形成されると共に全盛を迎えた時期であった。この時期に登場した中国古代史研究の諸々の構想や業績を、時間の順を追って緻密に分析していく。

### (2) 制度史との関わりのもとでの思想史研究

思想史研究の主要な研究対象は構想や理論等だが、それらと現実の制度との関係にも注目する。制度を研究対象に含めるのは、様々な構想は制度との緊張関係のもとで産出されるものであり、制度を視野に入れることで思想の分析がより深まると考えられるためである。ただ制度から思想を検証する際、制度に反映されなかった思想を無意味と考えるのではなく、また制度から完全に独立させて思想の意味を評価するのでもなく、思想と制度の間になぜ差異が生じたのか、その具体的条件を分析していきたい。

本研究では、顧頡剛・傅斯年が関与した語史所・史語所や、関係する大学(中山大学・燕京大学の他、傅と胡適が教えた北京大学、王国維の衣鉢を継ぐとされる清華大学に着目する)における、研究組織や学科体制・カリキュラム等を分析し、相互の展開や関係を明らかにする。

### (3) 諸々の「学史」を發生的に捉え直す

諸々の近代学術が生成過程にあった1930年頃の中国においては、諸学の境界は曖昧であった。歴史学も、同じように形成途上にあ

った諸学との交渉の中で形成されていき、諸学が互いに差異化する中で境界が浮かび上がり、独立した学問分野の形成に至った、と言える。そのため、本研究で直接の対象とするのは歴史学であるが、関係する諸学問の当時における動向に常に目を配りながら研究を進める必要がある。

その際、既に書かれている様々な学史を前提とするが、学史には、特定の学問を中心とし、他の学問との関係が疎かになりがち、学史が書かれる時点での学の発達段階を前提とし、そこに至る過程として学問を跡付ける目的論的傾向がある、といった問題がある。

これら問題点に対し、応募者は諸学の形成及び相互交渉を、あくまで各時点での状況に即して分析する。そしてこの発想を地域間にも応用し、中国が欧米や日本から完成した学問を輸入したと捉えるのではなく、各地域の学問を同時代現象として捉える視角も重視する。

## 3. 研究成果

2008年9月の採択決定後、2008年度は以下の内容に重点的に取り組んだ。(1)本研究の主要な研究対象である顧頡剛と傅斯年の中国古代史研究について、その著作において言及されている同時代の学者との関係も含め、比較しながら分析した。主に注意したのは、彼らが古代の史資料を具体的にどのように扱い、結果として明示的・非明示的にいかなる中国古代史像を提示したかという点である。これによって、両者の共通点と相違をより詳細に跡付け、1930年前後中国の古代史研究の形成と展開を、「疑古」などの単純な分類に収斂しない形で描き直すことを目指した。(2)顧と傅は共に中国古代史における「民族」の問題を重視していたが、その学術的背景と、古代史研究における内在的な意味、また現実の民族論との関わりを研究した。その際には、同時代の日本の中国史学よりする民族論との比較の視点も取り入れた。これによって、1930年前後中国の古代史研究が、現実の社会・政治との様々な緊張関係のもとで成立していったこと、日中間で先鋭な対立を構成していた民族・領土論の問題に関し、両者の間に共通する論理が見られること、を明らかにした。(3)顧や傅の構想した史学が、中山大学語言歴史学研究所から中央研究院、北京大学等へいかに展開したか、「社会科学」や「文籍校訂」等の領域との関係、また学術機関の制度的改変の側面も重視しながら研究した。

続いて2009年度は、1年目の研究を補充し、新たに研究を進め、その成果を発表した。まず、1年目からの継続として、中山大学語言歴史学研究所から中央研究院歴史語言研究

所への展開を研究した。考古学・歴史学・言語学・民俗学の諸分野に即して、その研究計画と実際に実施された内容を比較検討し、顧頡剛と傅斯年の学術構想の差異、研究人員の異動とも関連させて、両研究機関の異同を明らかにした。

2009年度の新たな研究としては、上述の2つの研究所が共に「歴史」と「言語（語言）」を組み合わせた名前となっていることから、なぜその両者が結び付くのか、傅斯年のドイツ留学経験から、また、近代日本における文献学の提唱とも比較して、分析を加えた。「歴史」と「言語」の組み合わせは、単に歴史学と言語学を並列させたものではなく、清末以来の「国（故）学」との継承・断絶関係のもと、中国を、その周辺地域をも巻き込みつつ歴史的に位置付けることを目指した、一種の方法論であったことが分かった。そこでは民族学・考古学が重要な役割を果たしていた。加えて、1930年前後の中国における歴史学形成の背景として、学術の社会的位置付けと制度的保障、及び諸学科間の関係をめぐり、当時の思想と具体的な制度・実践を論じた。

以上2年間の研究内容につき、現時点では3本の論文が公刊に至っている。まだ公刊されていない部分については、速やかな発表を目指す。今後は、本研究課題について分析を深めると同時に、対象とする学者の範囲を広げていく必要があると考えられる。総じて、2年間の研究により、1930年頃の中国古代史研究についての、「疑古」から「積古」ないし「再建」へ、という流れを再検討することができ、また、1930年前後中国における歴史学の形成について、欧米・日本の学術動向と関連づけつつ、知見を得ることができた。そして、研究の視点及び史料収集等について、今後研究を進めていくための基礎を形成することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 竹元規人, 1930年前後中国關於“學術自由”、“學術社会”的思想与制度, 學術研究, 査読有, 2010年3期, 2010年, 14-25
- ② 竹元規人, 国立中山大学語言歴史学研究  
所から国立中央研究院歴史語言研究所へ  
——学術構想, 研究活動と研究人員に關  
する整理と分析——, 福岡教育大学紀  
要・第一分冊, 査読無, 59巻, 2010年,  
65-109,  
<http://libir.fukuoka-edu.ac.jp/dspace/handle/123456789/878>
- ③ 竹元規人, 顧頡剛、傅斯年の中国上古史  
研究と民族論・疆域論, 中国哲学研究,

査読有, 24号, 2009年, 229-250

[学会発表] (計1件)

- ① 竹元規人, 顧頡剛と傅斯年の中国古代史  
像: その民族論との関わりから, 中国哲  
学研究会, 2009年2月19日, 東京大  
学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

竹元規人 (TAKEMOTO NORIHITO)  
福岡教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 80452704